

真実かどうか冷静に見つめたい

—「嗚呼満蒙開拓団」を観て想うこと—

高嶋 敏展

子供の頃、テレビで見た中国残留孤児の肉親探しのニュースは不思議だった。なぜ、もっと早く探しに来なかったのか。なぜ、子供を捨てて親だけ日本に帰って行ったのか。

「嗚呼満蒙開拓団」で描かれていた事が事実であれば、謎のいくつかが解けた事になる。城山三郎の小説で好きだった広田弘毅のイメージも少し変わった。敗戦が濃厚になった時点でも大陸に入植を続けさせ、既成事実の為にわざと引き上げを送らせる。今、イスラエルがヨルダン川西岸やガザ地区で行っている既成事実、占領地へ入植を続けているのはまったく同じ手法だと感じた。いつの世も「お上」のなさる事に庶民は翻弄されている。

丁度、近所に満州に農業技師として19歳で渡った老人が健在なので、話を聞いてみた。たまたま、農学校を卒業したので満州の農学校の講師として職を得た。全国各地から入植して来た開拓民に畜産技術を教えていたそうだ。

「農家の次男三男には夢がない。大陸で一旗揚げてやろうと意気込んでいた」と映画と同じ言葉に当時の空気を感じた。現地徴兵されてもうちょっとでシベリア送りだったが、脱走して生き延びたという。

その老人が語るには、開拓地での農民は現地人に非常に恨まれていた。しかし、故郷を捨てた農民に他にどんな方法があったのかと。農民が土地を奪われる、その辛さを誰よりも知るのと同じ農民だった。知って、知らぬふり、何も語らぬ事しか当時はできなかったという。

方正との間に友好交流が続いていると知らせた。「中国には罪と人を分ける考え方がある。故郷を離れ、移り住んで来た日本の農民の辛さを、中国の農民達も解っていたのではないか」と興味深げに話した。

蛇足ではあるが、南京大虐殺についても、当時の満州で噂を聞いたことがあり、実際、起こりえる状況だったと思うと話してくれた。

「嗚呼満蒙開拓団」は時代の雰囲気をよく表していると思うが、描かれている事が事実であるのか、虚実であるのか、あるいは特定のある人には真実であるのか私にはわからない。今、私たちを取り巻く社会はあまりに多くの情報があふれていて、真贋の見極めがあやふやになっているからだ。私はこの映画を賛美するのではなく、冷静に見つめてみようと思う。その事が歴史から学ぶ一歩であると信じたい。

情報の受け売りではなく、様々な角度から「いつ、誰が、なぜ」を考えながらものを見つめる努力をしようと思う。

現代人はあまりに情報に「受け身」ではないか。ワイドショーやモーニングショーで流された情報の中に間違いや一方的なバッシングは含まれていないだろうか。多数の論理や正義を振りかざしてはいないか。

インターネットの世界では情報は現れ、溢れ、いつの間にか跡形もなく消えている。鵜呑みにするにはあまりにも曖昧な情報源だと危機感を感じる。

世界を平和に出来る方法は歴史をきちんと学ぶ、知る事が最も簡単なように思える。欲と利害で行われた戦争のむなしさ、惨めさを考えれば殺し合わない事がいかに賢明な判断かわかると思うがいかがだろう。

簡単な結論が、最も解りやすく深い。人が人と殺し合う事は悲惨で、情けなく、悲しい事だと思う。また、人を殺す道具で人の幸せや平和は作れないだろう。

(たかしま・としのぶ：1972年生まれ。島根県出身。写真家、アートプランナー。旧満洲へ渡った父の従兄弟が19歳で満洲に農業技師として移住した者があり、映画「嗚呼 満蒙開拓団」に関心を持ち、松江での自主上映会に参加)